
白玉楼の小さな事件

蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白玉楼の小さな事件

【Nコード】

N4755H

【作者名】

蒼

【あらすじ】

生真面目な妖夢が幽々子が起きてもまだ起きてない？そんな不思議な出来事の話

(前書き)

ちよつとキャラが壊れているかも。こんなのは俺の嫁じゃない！
つて方は見ないほうがいいです。

とある日の白玉楼にて大きな声が突然響いた。

「妖夢ー、お腹すいたわー。朝ご飯はー？」

彼女ー西行寺幽々子ーは妖夢を探しているのだ。とても珍しいことである。基本的に妖夢は主人である幽々子よりも早く起きているのだ。そんな真面目な妖夢が朝食の支度もしないでまだ寝ているとは考えにくいのだ。

「変ねー。妖夢まだ寝てるのかしら？」

そう言いつつ妖夢の部屋に向かう幽々子。

「妖夢入るわよ」

妖夢の部屋に入ると、部屋の真ん中には布団が敷いてあり妖夢と思われる膨らみがあった。

「妖夢まだ寝てるのね。クスクス、可愛い寝顔でも見てみようかなー」

ニコニコ笑いながら布団に近づき顔を覗いてみた幽々子は驚いた。妖夢は顔を真っ赤にしながらうなされていたのだ。

「妖夢！？大変凄い熱だわ。とりあえず何か冷やすものを！」

言うが速いか幽々子は、水を入れた桶と白いタオルを持ってきた。パチャツ

幽々子は濡れタオルを妖夢の頭に置き、永琳を呼びに行った。

「風邪ね。通常より熱が高めだけど所詮風邪は風邪、心配しなくても大丈夫よ」

「そう、ならいいけど」

「これが薬よ。食後に飲ませてね」

「わかったわ」

暗い顔のまま返事をする幽々子に永琳はため息をつく。

「この子ならすぐ元気になるわよ」

「・・・うん」

「じゃあ帰るけど、あの葉は食後に飲ませてよ」

「わかってる」

「お大事にね」

一言いうと永琳は永遠亭へと帰っていった。

一人残された幽々子は妖夢のためにお粥を作り出した。

「うー・・・ゆ・・・幽々子様・・・行かないで」

幽々子がお粥を作り終わり妖夢の部屋に戻ってきたら妖夢はうなされていた。しかも、泣きながら。

「お爺ちゃんも居なくなつて・・・独りぼっちはいやだよ」

「妖夢、私はここに居るわよ。大丈夫一人にしないわ」

布団に入り抱き締めてあげると、妖夢は徐々に落ち着いていき、幽々子の手を握ると安心してまた眠りだした。

（あったかい・・・ずっと昔にどこかで感じた暖かさだ）

ゆっくり目を開くと見慣れた柄の着物が見えた。驚いて瞬き繰り返した。

「あら起きたの？おはよう妖夢」

「ふえっ、お、おはようございます。・・・あの、その、なぜ一緒に布団に入っているのですか？」

顔を赤く染めながら聞く。

「だってうなされてたんだもの。それよりお粥を食べなさい、あなたは病人なのよ」「あ、すいません！風邪など何でもありませんので、すぐ働き「ダメよ。風邪なんだし安静にしていなさい」・・・ですが」

はぁーとため息をつくとき幽々子は、起き上がりかけていた妖夢の体

を抱えて顔を近付ける。

「わっ、な、なんですか？幽々子様！？」

妖艶な笑みを浮かべながら妖夢の顔に手を添え、自分の方へ向かせて言った。

「これは命令よ。あなたは主人の命令が聞けないのかしら？」

「・・・わかりました」赤い顔でそっぽを向いた妖夢を見て、悪戯っぽく笑う。

「よろしい。じゃあ、あーんしなさい。命令よ」

「っあ、あーん」

片手で妖夢を抱きながらスプーンにお粥を掬い妖夢の口に近付ける幽々子と、顔を赤く染めつつ命令に従いおとなしく口を開ける妖夢。ぱくっ

「おいしい？」

「はい、とてもおいしいです。あの・・・ありがとうございます幽々子様。私などのために看病までしていただき」

「いいのよ。私はね妖夢、あなたのことが好きなの。だから別にどうってことないのよ」

「いえ、でも、やはりお礼くらいは」

「じゃあ、風邪が治ったら明日一日私の言うことを全部きくこと」

「はい！」

「ほら続きよ。はい、あーん」

「あ、あーん」

「幽々子様。風邪が治りました」

「本当？なら約束通り今日一日私の言うことをきいてもらおうわよ」

「はい！何をすればよろしいですか？」

「うーん、まずはねえ・・・好きって言うてみて」

「ふえっ、す、好きですか」

「うん。ほら、早く言うてよ」

「・・・きです」

「聞こえないわよー」

「好きです！幽々子様」

「よくできました。大好きよ、妖夢」

突然の言葉に動揺したのか真っ赤になりながらあわてて言う。

「わ、私も幽々子様のこと大好きです」

「あら嬉しい。大好きだなんて。顔も赤くしちゃって可愛い」

「か、可愛いだなんてそんな」

「妖夢は十分可愛いわよ。ところで何で風邪をひいたの？」

「人里で買ひ物をしていて雨が降って濡れてしましまして、そのまま日課の稽古をしていたら風邪を・・・」

「全くしょうのない娘ね。稽古をするのはいいけど風邪をひいたのではもともこないわ」

「すいません、早く強くなって幽々子様のお役に立ちたくて・・・」

「妖夢、あなたは今でも十分私の役に立ってるわ。だから無理しちゃダメ。あなたの代わりは居ないのよ妖夢」

「あ、ありがとうございます幽々子様」

この魂魄妖夢一生貴方に使えさせていただきます。そう妖夢は心の中と思う。

幽々子と妖夢は知らぬ間に笑みを浮かべていた。

桜がとても綺麗に舞っていた。

(後書き)

かなりぐだぐだになりました。読んでくれた方本当にありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4755h/>

白玉楼の小さな事件

2010年10月9日00時48分発行